

没後40年 鴨居玲展 第2弾

写真の中の鴨居玲 –内なるCamoy 外なるCamoy–



鴨居玲《出を待つ（道化師）》1984年
–「写真の中の鴨居玲–内なるCamoy 外なるCamoy–」より–

■ 橋本雅邦と襖絵／

前田家歴代の肖像画【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 優品選 –春と夏の美術–／前田利家とその時代【古美術】

■ 釉下彩のわざ【近現代工芸】

■ 没後50年 南政善【近現代絵画】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 4月の行事予定
- 友の会 会員募集
- アラカルト ただいま展示中

企画展(第7~9展示室)

没後40年 鴨居玲展 第2弾

写真の中の鴨居玲 ー内なるCamoy 外なるCamoyー

主催：石川県立美術館・北國新聞社 協力：公益財団法人 日動美術財団

富山栄美子撮影

4月25日(土)~5月24日(日) 会期中無休

鴨居玲は、絵を描く人であると同時に、自らもまた絵になる存在でした。写真家の富山栄美子がその半生を撮影した写真集『鴨居玲』は、1995年に刊行されています。本展では、この写真集に収録された作品に未発表写真を加えた約90点のポートレートと、約40点の絵画作品をご紹介します。

2026年2月開催の「没後40年 鴨居玲」展から2か月。多くの来場者の姿に、いまだ衰えぬ鴨居玲の人氣ぶりを目の当たりにしました。本展はその第2弾として、鴨居芸術の核心に迫ります。

鴨居玲は、生涯をかけて「人間とは何か」を問い続けた画家でした。そのため作品はしばしば私生活やその人となりと重ねて語られます。生前を知る人々は、彼のかっこよさや人柄、そしていかに魅了されたかを口々に語ります。しかし、その華やかな評価の裏で、彼は常に行きづまりを抱えていたことも事実です。そして1985年、57歳でその生涯を閉じたのです。

そんな鴨居玲を15年以上にわたり撮り続けたのが、富山栄美子です。1971年、スペインで生活を共にし始めた際、「これからは私だけを撮り続けてもらえないだろうか」と鴨居に請われ、ひとりの画家の生涯を記録することになります。ファイナダー越しの鴨居玲は、気取った姿も、おどけた表情も、深い苦悩に沈む面差しも見せています。

「作品のすべてが自画像である」ともいわれる鴨居作品に通底する「人間とは何か」という問い。本展が、その問いに向き合うひとときとなり、鑑賞者それぞれの答えを見つける機会となることでしょう。

【構成】

序章 青年期

生まれ育った金沢での青年期。そして富山栄美子と知り合う以前の、若き日の鴨居玲を写真で追う。

第1章 私の村、ヨーロッパでの生活

安井賞受賞後、スペイン行きを決意。「私の村」と呼び親しんだバル

ペーニヤスでの生活が始まる。水を得た魚のように村人たちを描き、画家として絶頂期を迎える。見る者が「いつまでも続いてほしい」と思うほどの幸福感を湛えたポートレート。

第2章 帰国後、神戸時代

1977年にスペイン、パリから帰国し、神戸に構えたアトリエでの姿。画家として地位を確立する一方、裸婦制作の混迷から行きづまり懊悩する様子が見えてくる。

【観覧料】

一般 800円(600円)

大学生 600円(500円)

高校生以下無料

※()内は20名以上の団体

※2階コレクション展観覧料を含む

※身体障がい者・精神障がい者保健福祉療育

手帳をお持ちの方、またはミライロIDをご

提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

※没後40年鴨居玲展第1弾の入場券に付帯

している割引券で、団体料金に割引されます

【関連行事】

◆土曜講座 各回午後1時30分~午後3時

講義室

5月16日(土)「鴨居玲小話」日置樹也(当館学芸員)

5月23日(土)「鴨居玲 魅惑の理由」前多武志(当館学芸第一課長)

◆ギャラリートーク 各回午後1時30分~(30分程度) 企画展示室

4月26日(日)、5月3日(日)・10日(日)・17日(日)

要観覧料、申込不要



鴨居玲 《静止した刻》1968年



富山栄美子 撮影

橋本雅邦と襖絵

3月24日(火)～4月13日(月) 会期中無休

学芸員の眼

富山栄美子氏が撮りためた写真は段ボール箱で約3箱、アルバムに貼りこまれたプリントからネガまで総数3千点に及ぶものでした。当館の若いスタッフが1点1点データ化しました。

アルバムを開いてみると、そこには、伝説となりつつある一人の画家の半生が記録されていたのです。これまで展覧会や写真集等を通して知られていた、写真のほかにも多くの写真が、画家・鴨居玲の生きた証を伝えていました。

なかでも心を打つのは、制作に没頭する姿です。美大の集中講義にもアメ車で颯爽とのりつけ、スターのオーラを放っていたと言われる鴨居玲が、髪を振り乱し、なりふり構わぬ姿でキャンバスと向き合う姿に圧倒されることでしょう。映画スターのような姿だけが鴨居玲の「かっこよさ」ではないのです。撮影者への篤い信頼が無ければ映し出されることのなかった姿です。

前号で、襖絵が明治43年の明治天皇行幸に備えて制作されたことをお伝えしました。今回は、襖絵の画題について考えてみたいと思います。

天皇行幸と「四季山水図」という画題の関係は、空間の持つ性格や時代の美意識を反映しています。行幸とはきわめて儀礼性の高い出来事です。とりわけ明治後期は、皇室を中心とする国家体制が安定し、行幸は国家的秩序を象徴する行為でもありました。その場となる便殿には、格式と同時に、天皇が安らげる落ち着きも求められます。

そこで選ばれた「四季山水図」とは、実は象徴的な主題です。中国由来の山水画は、理想化された自然を描くことで、秩序ある世界観や精神的静謐を表してきました。とりわけ四季を織り込む構成は、永続性と自然の調和を示し、天下泰平を寿ぐ、行幸の場にあふらしい選択だったのです。

さらに明治という時代を考えると、その意義は一

層明確になります。西洋化が進むなかで、近代的な住宅様式を取り入れつつも、伝統的な山水画題を用いることで、日本の美術的連続性を体現もできます。つまり、「四季山水図」は単に空間を広く見せるための穏やかな風景ではなく、天皇を迎えるという政治的・儀礼的狀況のなかで、調和・永続・安定といった理念を視覚化する装置として選ばれた画題であり、近代国家の美意識と伝統の継承とが交差する象徴的な表現だったのです。

作者に選ばれた、狩野派最後の画家ともいえる橋本雅邦は、近代日本画との橋渡しを担いました。御用絵師集団として狩野派が、日本の障壁画文化を支えてきたことを考えると、雅邦が制作者に選ばれたことは必然だったでしょう。本作は、東洋画の伝統技法を踏まえながらも、近代への移行を如実に感じさせる柔らかな筆法で描かれており、格式と安らぎを兼ね備えた明治という時代の美意識を今に伝えています。



富山栄美子 撮影



橋本雅邦《四季山水図》のうち秋景

前田家歴代の肖像画

4月19日(日)～6月1日(月) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館では、特集展示「前田家歴代の肖像画」を開催します。現在放送中のNHK大河ドラマ「豊臣兄弟」に登場する前田利家が、今年の「百万石まつり」にも現れるとあって、今年の前半は、東京国立博物館で開催される特別展とあわせて、「加賀前田家」が大いに盛り上がることでしょう。

一般に、権力者の肖像画とは、その人物の没後、崇め、供養し、敬うために描かれます。前田家歴代の人々の中でも、利家の肖像画はもつとも多く、しかも複数種類描かれており、幕末に至るまで長く慕われ続けていたことがわかります。ドラマでは「槍の又三」と称された勇ましい利家が登場しますが、桶狭間の合戦における活躍ぶりは「首級を下げた馬上の利家」の肖像画とともに、後世まで語られ続けました。こうした肖像画は、家臣の家で祀られ、また明治以降



《桶狭間凱旋図》

も金沢の街中における祭祀で掲げられました。一方、藩祖を神として、あるいは歴代藩主を君主として崇める形式として伝えられる肖像画の多くは、上置に座した姿です。中には、肖像の上に幕と御簾が描かれることもあり、これらは特に神像形式といって、描かれた人物を神格化したものです。また、刀剣や書物、見台、脇息など、その人物にゆかりの深いもの、愛用品がともに描かれた肖像画は、その人物がどのような人物であったかを伝えていきます。

本特集では、江戸時代に描かれた肖像画から、明治時代に模写された肖像画までひろく紹介します。

優品選 ー春と夏の美術ー

3月24日(火)～4月13日(月) 会期中無休

前号に引き続き、特集展示「優品選ー春と夏の美術ー」から出品作品を紹介いたします。

昨年の4月に開催した企画展「宗雪・相説」展では、《四季草花図屏風》と称される四季の草花を右隻から左隻へと描いた屏風を多く紹介しましたが、本特集では、その企画展で紹介できなかった《四季草花図屏風》うち、春と夏の草花を描いた一隻を紹介いたします。

この《四季草花図屏風》は、昭和55年に開催された「宗雪・相説」展では、展覧会図録の表紙にもなった作品で、金と銀の切箔を画面全体に散らし、雲間から藤・山吹・牡丹・芥子・撫子・燕子花・若竹がのぞく構成となっています。華やかな装飾性に富む作品で、「伊年」印を持つ《四季草花図屏風》の代表作のひとつです。

春夏をあらわす景物は、草花だけではありません。水車は夏をあらわすものとして、美術作品の中にも多く登場します。《水車図》に描かれる水車と柳は、よくある組み合わせで、水面からのぞく蛇籠も描かれています。これに橋と月を加えた景色は宇治橋と解されており、こうした画題は夏を表すだけでなく、現世と来世を結ぶ場所、という意味も隠されているのです。

水車や蛇籠など幾何学的な模様は、工芸作品を飾るデザインに相応しく、《銀象嵌水車文鏡》《銀象嵌籠目紋鏡》にみることができま。本特集では工芸作品も紹介しますので、本号裏表紙の「アラカルト」もあわせてご一読ください。



《水車図》

釉下彩のわざ

4月19日(日)~6月1日(月) 会期中無休

陶芸の技法「ゆうかさい釉下彩」と聞いて、具体的な作品を思い浮かべられる人は、決して多くないかもしれません。また、釉下彩を知っている方でも、そのイメージはさまざまでしょう。本展では、当館コレクションの釉下彩作品を通して、その多様な表現と技法の広がりをご紹介します。

釉下彩とは、素地に文様を施し、その上から透明な釉薬をかけて焼成する加飾技法です。釉薬の下に文様が包み込まれるため、文様が保護されるとともに、落ち着いた奥行きのある表情が生まれます。

代表的な例としては、透明釉の下に青や黒の顔料で文様を描く染付や鉄絵があります。また、素地に異

なる土を埋め込んで文様を表す象嵌ぞうがん、白化粧の上を黒い絵具で覆い、黒い部分を掻き落として文様を浮かび上がらせる技法なども、釉下彩に含まれます。さらに、本県を代表する陶芸家である吉田美統の釉裏金彩や、中田一於の釉裏銀彩も釉下彩の一種です。中田一於は昨年、重要無形文化財「釉下彩」保持者に認定されました。

本展では、「染付」「鉄絵」「釉裏金彩・釉裏銀彩」などのグループごとに作品を紹介し、釉下彩がもつ豊かな表現世界をひもときます。ぜひ会場で、あなたの心に響く、推しの釉下彩を見つけてみてください。



吉田美統《釉裏金彩牡丹唐草文鉢》

前田利家とその時代

4月19日(日)~6月1日(月) 会期中無休

加賀藩の礎を築いた藩祖・前田利家(1538~1599)。本展示では、激動の時代を駆け抜けた利家と、その周囲で同時代を生きた家臣や子女などの肖像画や書状を紹介します。

尾張荒子に生まれた利家は、織田信長に仕えて戦功を立て、永禄12年(1569)には兄に代わって家督を相続しました。長篠合戦(1575)や同年の越前一向一揆攻めでの功績により、越前府中で三万三千石の大名となり、柴田勝家の与力となります。

その後、天正9年(1581)に能登一國を得ましたが、翌年の本能寺の変によって状況は大きく変動します。勝家と羽柴秀吉が衝突した賤ヶ岳の戦いで、秀吉に降伏した利家は、一転北ノ庄攻めに参加し、合戦後は加賀国河北郡と石川郡を増設されて金沢に入り、金沢城の整備を始めます。また越中の佐々成政が

秀吉に降伏すると、その所領であった砺波、射水、婦負の三郡が利家嫡男の利長に与えられました。

天正18年(1590)には北条攻めに出陣して北国勢を取りまとめ、関東平定後は利長とともに御伽衆に加わるなど、豊臣大名としての地位を固めていきます。天正20年(1592)の朝鮮出兵に際しては、秀吉とともに肥前名護屋に入りました。文禄3年(1594)に秀吉が死去した後は、豊臣秀頼の傅役をつとめ、存在感を増す徳川家康と豊臣方の間を取り持ちますが、翌年に大坂で死去します。

利家の在世、前田家の所領は、加賀・能登・越中3カ国あわせて七十七万石に及びました。まさに百万石の礎を築いた存在である利家とその時代を、作品から振り返ります。



石川県指定文化財《前田利家画像》

優品選

4月19日(日)~6月1日(月) 会期中無休

日本画分野では、春から初夏の季節に合わせて作品を選びました。その中から稲元実の《気》を紹介いたします。稲元実は、自らの家族を生涯の主題として、数々の作品を遺しました。その稲元が家族とは別に得意としたモチーフが、人をして「牡丹の稲元」と言わしめた白い牡丹です。清新なこの花も稲元が手掛けると、もの言いたげに独特な光を放ち、まさに作品タイトルである「気」を感じさせます。

油彩画分野からは、勝本富士雄《Rising Sun 赤》をご紹介します。生涯抽象画を描き続けたことで知られる勝本の作風は、いくつかの変遷を遂げます。晩年には「ライジングサン」と「鋭角の雲」

のシリーズを描きました。いずれも黎明の空に感銘を受けて制作のモチーフとしています。この作品では、昇る朝陽を赤を基調に照り映える雲を菱形で描いて、日の出の神々しさをあらわしました。

彫刻分野から、矩幸成《春を包む》をご紹介します。ポーズをとり、やや視線を下げた裸婦像です。リアリズムに徹した、量感あふれる裸婦像に取り組み続けた矩幸成30代の作品は瑞々しさに満ちているようです。師・北村西望同様、自らの中にある詩情を作品に表現することを重視し、そのためには自分の心を磨くことが必要だと記した作者。若き日の本作もまたその過程にある作品といえるでしょう。



稲元実《気》

没後50年 南政善

4月19日(日)~6月1日(月) 会期中無休

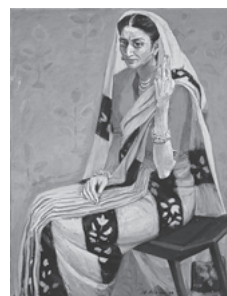
本特集では画家・南政善(1908~1976)の没後50年を記念して、その味わい深い作品をご覧ください。いただきます。

現在の志賀町に生まれた南は、腕白な少年時代から美術に興味を持ち始め、やがて「絵描きになりたい」と絵画の勉強を志しました。東京美術学校の油画科に入学し、卒業するまでに帝展、新文展、日展、第二部会展(昭和10年帝展改組時に結成)へ出品・受賞するなど、各公募展で目覚ましい活躍をみせます。

新進の画家として期待された南は、太平洋戦争中に中国・上海、ジャワ・フィリピンへ派遣され、戦争記録画の制作にもあたりました。現地で見つけた東南アジアの風俗に興味を惹かれた南は、生涯のテーマとなる「アジアの女性とそのコスチューム」を見出すこととなります。

南が手がけた人物画は、師事した藤島武二の影響で、的確なタッチと巧みな色面構成をみせる画風を軸としています。モデルとポーズ、構図にもこだわりぬき、画中の人物はいまにも動き出しそうな存在に満ちています。納得し感動しなければ描けないという、率直な感銘が南の制作の原動力でした。エキゾチックな鮮やかなコントラストにも、どこか親しみを覚えさせるのは、「確かにアジアは一つであると思った」、「日本人であることを生かした作品をつくりあげてゆきたい」との意図が込められているからでしょう。

今回は当館収蔵品のなかから厳選して、油絵・素描作品約20点をご紹介します。



南政善《印度の女》

第3～9展示室 第82回現代美術展 洋画・工芸・写真

主催／一般財団法人石川県美術文化協会、北國新聞社、一般財団法人石川県芸術文化協会、北陸放送、テレビ金沢、石川県、金沢市、石川県教育委員会、金沢市教育委員会

3月27日(金)～4月13日(月) 会期中無休

昭和20年10月に第1回展が開催された現代美術展は、本年82回展を迎えます。その間、文化勲章受章者、日本芸術院会員、人間国宝をはじめ、多くの実力作家を生み出し、その成果は「美術王国石川」として大きく花開いております。

本展では、所属会派を超えて、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真の6部門から、石川県美術文化協会会員らの秀作に、一般公募からの入賞・入選者の意欲作を一堂に展示します。

◆部門

洋画(第7・8・9展示室)

工芸(第5・6展示室)

写真(第3・4展示室)

※金沢21世紀美術館では、日本画・彫刻・書が展示されます。

◆観覧料(金沢21世紀美術館と共通)

		一般	高校・大学生	小・中学生
前売り	900円	1,000円	700円	600円
当日	600円	700円	700円	600円
	500円			

団体(20人以上)は団体割引(前売りから100円引き)。

※当館友の会会員は会員証の提示で団体料金

◆作品解説

会期中、石川県美術文化協会役員・会員による作品解説を行います。

◆連絡先

一般財団法人石川県美術文化協会

電話・076-260-3581(平日午前10時～午後6時)

友の会 令和8年度入会受付中!

4月1日(水)より来館での入会受付を開始します。

今年も楽しい特典が盛りだくさん!ぜひご入会ください。



受付場所 美術館エントランス総合案内

受付時間 午前9時30分～午後5時(休館日を除く)

申込方法 入会申込書に必要事項を記入し、会費とともにご提出ください。

会員証の有効期限

令和8年4月1日から令和9年3月31日まで

*会員証の対象は記名者本人のみ有効

(ご家族の方との連名受付はございません)。

*一度納入された会費の返金はできません。

*会員証紛失による再発行はできません。

4月の行事予定

■のびのび鑑賞デー

作品について感じたこと、思ったこととお話しながらコレクション展を楽しめる日です。

※ただし、通常の開館日のお客様同士の会話を制限するものではありません。

※のびのび鑑賞デーのご利用に、特別な手続きは不要です。

日時: 4月12日(日) 9時30分～18時

(展示室への入室は17時30分まで)

会場: 2階コレクション展示室(前田育徳会尊經閣文庫分館、第1・2展示室のみ)

■特別展「没後40年 鴨居玲展 第2弾 写真の中の鴨居玲—内なるCamoy 外なるCamoy—」関連行事

※各イベント情報は本誌2頁をご参照ください。

《濃茶地籬崩白躑躅金蝶模様唐織》こいちゃじまがきくずししろつつじきんちょうもようからおり

丈149.5cm 裾68.3cm
江戸時代18世紀

飛色と呼ばれる赤みのある濃い茶色地に、斜め格子状の籬と白い躑躅が交互に配され、大きな縞模様を構成しています。無紅という年を重ねた女性役に用いられる装束で、金色の蝶が舞うことから、品格ある女性の役柄に用いられたことがうかがえます。

前田家が所蔵する能装束には、能装束を包む畳紙に、能装束の種類と模様が墨書されています。本装束の籬は、まるで手描きされたように不規則で勢いがあります。『マガキ崩シ』と称されていたようです。

江戸時代の前田家には、実に400領以上の能装束があったと推測されています。4月中旬から東京国立博物館にて開催される特別展「百万石！加賀前田家」にも、能装束は数多く紹介されますが、本館では、初夏の季節にあわせた白躑躅模様の能装束を展示いたします。すでに前身頃と後身頃が分離しているため、衣桁に掛けることはできません。ぜひお見逃しなく。

次回の展覧会

令和8年4月19日(日)
～6月1日(月)

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室	
前田家歴代の肖像画		前田利家とその時代	
第3展示室	第3・4・6展示室	第5展示室	企画展示室
没後50年 南政善 【近現代絵画】	優品選 【近現代絵画・彫刻】	釉下彩のわざ 【近現代工芸】	写真の中の鳴居玲 -内なるCamoy 外なるCamoy- 4月25日(土)～5月24日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
4月6日は第1月曜日より
コレクション展観覧無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

4月の休館日は
14日(火)～18日(土)石川県立美術館だより
第510号(毎月発行)
2026年4月1日発行〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

広告



広告代理店が運営する 大人のためのデザインスクール

キテンスクールの
オンライン授業なら…

- 01 | オンラインで好きな時間にマイペースで学べます
- 02 | スキルアップ・副業・趣味に活かせます

キテンスクール 〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 tel:072-668-3275 株式会社ウィット

詳しい資料の
ご請求はこちら